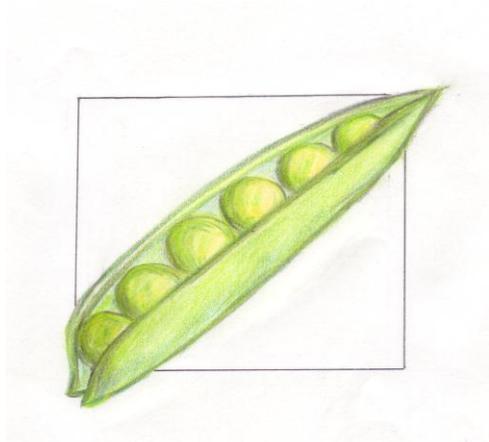


全身麻酔のしおり



医療法人発達歯科会
おがた小児歯科医院

目次

【1】全身麻酔の理解のために

【2】全身麻酔に備えて御協力いただきたいこと

全身麻酔による歯の治療は

新しい方法や珍しい方法ではありません。全身麻酔という特別な技術と設備が必要なので、どこでもいつでもというわけにはいきませんが、アメリカやヨーロッパではもう50年前から一般的に行われています。日本では歯科で麻酔を始めてから30年になります。大学病院で行われることが多いのですが、最近では少しずつ開業医も手がけてきました。日本で開業医の全身麻酔の先鞭となったのがここ、おがた小児歯科医院です。おがた小児歯科医院では1979年の開業当時から全身麻酔を用いています。もちろん、何でも全身麻酔というわけではありません。おがた小児歯科医院なりのきちんとした基準があり、患者さんにとって全身麻酔が有利と考えた時がそれをお勧めするときです。我慢しなくていい歯科治療、痛くない歯科治療、安全で確実な歯科治療がおがた小児歯科医院の理念で、そのための全身麻酔と思ってください。医学の進歩は皆さんのためにあるのです。

おがた小児歯科医院 理事長 緒方克也

【1】全身麻酔の理解のために

1. はじめに

安全で快適な歯の治療が私たちの理想です。安全は身体だけでなく、心が傷つかないことも含めてのことです。

歯の治療が怖いというのはごく自然な気持ちで、我慢すると心臓がドキドキするなど、身体の内側でいろいろな変化が生じます。このような変化は良いことではありません。患者さんが動くことで、治療の質が確保できない事もあります。安全で快適な、そして質の高い歯の治療のため、また、子供の成長・発達や障害者の人格と尊厳を守るという考えから私たちは全身麻酔を使うことがあります。

2. 全身麻酔とは

全身麻酔とは、全身麻酔薬によって、意識がなくなり、痛みを感じないなどの状態です。患者さんは眠っている間に治療が終わります。

3. 麻酔の進歩と安全性

全身麻酔は怖いというイメージがありませんか？ここ40年で麻酔の技術と薬は飛躍的に進歩し、安全性も高くなりました。それでもいわゆる事故は稀に見られます。原因は患者さんの体質や医療者のエラーです。でも、その事故の確率は日常生活で交通事故に遭うよりも少ない確率です。

当院では年間約160例、のべ約5000例の全身麻酔を経験しておりますが、死亡や重篤な後遺症は現在のところ皆無です。一般的な統計では全身麻酔に起因する心停止例は10,000例に1例、死亡例は200,000例に1例くらいの割合です。これには重症の内臓疾患の方や高齢者も含まれていますので、全身状態に問題のない若い人や歯科の患者さんでは危険度はさらに低くなります。

ほとんどすべての医療用薬剤は、極少ない確率ながら、副作用という生体にとって好ましくない作用を起こすことがあります。薬物へのアレルギー反応などいろいろな合併症がおこる危険性があります。これらの兆候をいち早く察知し、対応するためにも全身麻酔中は専門の麻酔科医が常に患者さんの状態を監視し、血圧計、心電計、体温計、酸素飽和度計等を用いて患者さんの安全を確認しています。

また、歯科での全身麻酔では日本歯科麻酔学会が施行する認定医制度があり、卒業後歯科麻酔に関して経験と研鑽を積み、資格試験に合格した歯科医師は歯科麻酔認定医となります。また、厚生労働省の監督下に専門医制度が制定され認定医の中から試験を受けて専門医の指定も受けられるようになりました。当院では、全身麻酔をお受けになるすべての患者さんの麻酔は、歯科麻酔認定医または専門医が担当しています。

4. 全身麻酔の方法について

(1)当院では、吸入麻酔（ガス麻酔）による全身麻酔を施行しています。一般の外科手術でも使用されている方法で、すべての患者さんにおいて治療中の意識は全く無く、痛みはもちろんのことその他の感覚も記憶として残りません。

(2)まず、治療台の上で横になってから、麻酔がかかるために口と鼻を被うくらいのマスクを顔に当てていただきます。このマスクから酸素と麻酔剤が流れ、患者さんはそれを吸うことで麻酔がかかりすぐに意識がなくなります。

麻酔ガスのにおいが少しツンとするので、患者さんはマスクを嫌がったりしますが、息が苦しかったりはしません。

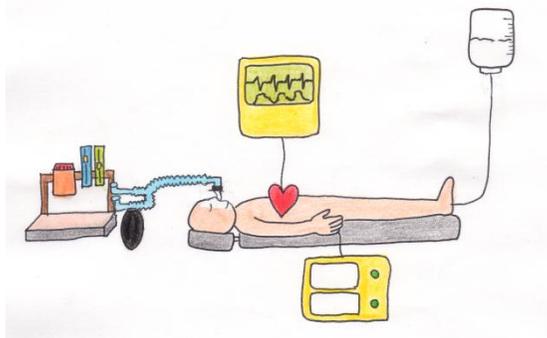


(3)マスクをきちんと顔に当てて吸わないと効き目がないので、激しく首を振ったり、手でマスクを除けようとする場合にはスタッフが患者さんを抑制する事があります。保護者の方は患者さんの意識がなくなるまで患者さんが見える場所にて頂いて結構です。

(4)意識がなくなり体の力も抜けた時点で、血圧計や心電計などのモニター類を患者さんに装着し本格的に麻酔を進めていきますので保護者の方にはこれより先、待合室でお待ち頂いています。（待ち時間の間外出される方は、必ず受付に声をおかけ下さい。）

(5)麻酔状態を安全に維持してゆくためには気道（呼吸のための道筋）の確保が必要です。気道の確保のために、患者さんの小指ほどの太さのチューブを鼻孔から気管の中に挿入します（気管挿管）。気管挿管をする時、患者さんはすでに麻酔がかかっているため挿管操作の記憶は残りません。

(6)麻酔中は点滴を行い、水分・電解質、必要な薬剤の投与を行います。また、血圧計、心電図計、体温計、酸素飽和度計の値を監視して患者さんの呼吸・循環状態の安全を確認しています。



(7)患者さんは酸素と麻酔ガスを呼吸し続けることで安定した状態を続けます。

(8) 麻酔ガスや全身麻酔剤を中止して、酸素だけを呼吸することによって麻酔から醒めて行きます。

(9) 気管内チューブは筋力や反射が十分に回復した時点で抜きます。

(10) 呼吸のための気管内チューブを抜いても、呼吸や循環状態に異常がないことを確認して、点滴や装着したモニター類もはずして、回復室に移ります。

1990年代後半からプロポフォールという新しい全身麻酔剤が諸外国に続いて日本でも使用されるようになりました。セボフルラン同様、安全で、覚醒も早く、麻酔後の嘔吐も少ないので日帰り麻酔に最適ですが、静脈への注射により投与しなければならぬので、当院ではこの全身麻酔剤を、ガス麻酔で完全に意識がなくなってから使用するようになっています。小児での有効用量が確立されていないので、原則として6歳以上の患者さんを対象としています。

5. 全身麻酔後の経過観察と帰宅について

回復室で

回復室では、保護者の方と一緒に過ごします。回復室に入ってすぐは、うとうとしたり、体に力が入らなかったりといった様子が見られますが、30分内外でかなり回復してきます（個人差があります）。体の調子がいつもと違うので、患者さんによっては不穏状態となつてしばらく機嫌が悪いこともあります。

座位をとっても気分が悪くなければ水分摂取（担当医が指示します）を始め、発熱や嘔吐の有無など帰宅に際して心配な要素がないかチェックしていきます。

帰宅

回復室での時間は1～2時間が目安で、麻酔担当医が全身状態を診て、最終的に帰宅の許可をいたします。時間はあくまでもめやすで、慣れない場所に長時間居ることが困難な場合など、個々にご希望があれば遠慮なくお申し出下さい。また、回復室で過ごす間に、治療医の説明や必要に応じて歯科衛生士の衛生指導の話などもあります。御意見、御質問等ありましたら遠慮なくおたずね下さい。

帰宅するに十分な状況になつても、歩行時のふらつきやめまいなどの症状は長時間残りがちです。また、歩くことで嘔吐したりすることもあります。できましたら、帰途の交通手段は自家用車あるいはタクシーの心づもりが安心かと思えます。

食事の開始

帰宅後疲労感が強ければまず休ませてください。自然な眠りで昼寝ができた後くらいに食事を開始するのが適切ですが、回復には個人差があり、飲水後も嘔吐が無く本人の希望があれば消化のいい物から食事の開始は可能です。嘔吐があつた後は、時間をおいて飲料水から再度経口摂取を始めして下さい。大部分の方が、夕方頃から食事が摂れて、だるさが軽減するようです。

6. 全身麻酔の合併症について

麻酔剤からの醒めは前記の経過が一般的です。てんかんや知的障害などの問題を抱える方では、てんかんや知的障害自体は麻酔中の経過や麻酔後の合併症に直接影響は及ぼしません。しかし、麻酔による体調や意識レベルの変化や口腔内の違和感が原因となつててんかん発作や、パニック、継続する嘔吐を引き起こすことがあります。また、小児(特に5歳以下)では、術前元気そうでも呼吸器に炎症を抱えていることが多く、麻酔をきっかけに悪くなることがあります。めったにないことですが、このように麻酔を一つのきっかけとして患者さん特有の問題が術後に尾を引くことがあります。このような場合、当院として可能な限り対応したいと考えていますが、問題の内容によってはかかりつけ医や夜間対応病院へご紹介させていただくことがあります。

帰宅後と連絡

ほとんどの患者さんは、翌日から通常通りの生活にもどれますが、麻酔からの回復経過によっては体調が万全でないかも知れません。翌日まで、ご家庭でゆっくりできる予定にされておいた方がよいでしょう。

帰宅後は、当日夜、電話連絡にて状況を確認させていただいてますが、お急ぎのお問い合わせがあるときには下記までご連絡下さい。

<連絡先電話番号>

- おがた小児歯科医院 092-472-2885
- 院長：石倉行男 090-7396-8584
(障害者歯科指導医、小児歯科専門医)
- 歯科医師：緒方克也 090-3412-1589
(障害者歯科指導医、歯科麻酔認定医、小児歯科認定医)
- 歯科医師：志岐晶子 090-2581-4392
自宅：092-663-1333
(歯科麻酔専門医、障害者歯科認定医)

保護者の入室について

保護者の方は患者さんと一緒に入室して、患者さんが麻酔ガスで眠るまで約5分程度同伴していただいかまいません。患者さんが麻酔ガスで眠った後は点滴をはじめたりモニターを装着したり、本格的に麻酔の処置に入りますので保護者の方は待合室でお待ち下さい。40分くらい後に終了時間の見込みをお伝えすることが出来ますので、終了時間を受付より御確認の上1~2時間の外出も可能です。事情により治療の見学をご希望の方は事前にご相談の上、対応致しますのでお申し出下さい。

【2】全身麻酔に備えてご協力いただきたいこと

当院の全身麻酔は、全身麻酔の説明→前日夕方の体調確認→絶飲食→麻酔当日という流れで進んでいきます。よって、以下のことにご協力をお願いします。

1. 体調の変化があれば早めにお知らせ下さい。

安全な麻酔も、患者さんの体調によっては体調の悪化を招く結果となりかねません。次の場合、麻酔を延期することがあります。

*37.5度以上の発熱、のどの痛み、頻繁で止まりにくい咳などの風邪症状・喘息症状

*嘔吐・下痢の症状

*ウィルス性伝染性疾患（はしか、水ぼうそう、おたふく風邪、風疹、手足口病、特発性発疹など）

*予防接種直後：生ワクチン（ポリオ、BCG、麻疹、風疹、水痘、おたふくかぜなど）は4週間、不活化ワクチン（3種混合、肝炎、インフルエンザなど）は2週間たって副反応が出ないか確認して、免疫がついてから麻酔をします。

*その他、ご心配なことがあれば早めにご相談下さい。歯科治療を急ぐ場合もありますので、体調の程度とのかねあいで保護者の方と十分お話をし、どうするか決めていきます。

喘息がある患者さんは、術前にかかりつけ医へ対診文書を発行して全身麻酔への相談や周術期の喘息管理をお願いしています。

また、当院は開業歯科医院で入院設備がありません。入院での治療を希望される場合は高次医療機関へのご紹介もしておりますので遠慮無くお申し出下さい。

2. 麻酔前の血液検査

採血が可能なら、麻酔術前検査として血液検査を行います。

3. 麻酔前日夕方の体調確認

翌日の全身麻酔に向けて、体調に変わったことがないかどうか当院より確認の電話をいたします。できれば、体温の測定を行っておいて下さい。

4. 麻酔前の絶飲食

これは守っていただくことの中で最も重要なことです。麻酔をかけるときに胃の中に内容物があると麻酔がかかった後、嘔吐してしまいます。

嘔吐物は肺の方へ流れ込みやすく重篤な肺炎を起こすことがあります。



絶飲食の時間	
午前中の麻酔の場合 (9時30分開始)	<ul style="list-style-type: none"> ・麻酔前日の夜中24時以降は絶食 ・24時～当日7時30分まで飲水可（量は自由） (ただし、水・お茶・ポカリのみ) ・当日朝7時30分からは絶飲食
午後の麻酔の場合 (13時30分開始)	<ul style="list-style-type: none"> ・当日朝7時30分以降は絶食 (朝食は7時30分までに軽食：いつもの半量で) ・当日7時30分～11時30分まで飲水可（量は自由） (ただし、水・お茶・ポカリのみ) ・当日11時30分からは絶飲食

*食べ物以外のものも口に入れないように注意してください。

*持病により長時間の絶飲食を行うことが望ましくない場合や、上記のスケジュールに無理がある場合は個別にスケジュールを立てます。

〔入浴について〕

入浴後は、のどが渇くものです。9時以降の絶飲食を守っていただくためにも早めに入浴を済ませ、早めに休ませましょう。麻酔当日は、入浴しない方がよい場合が多いので、前日はなるべく入浴しておきましょう。

〔絶飲食の厳守〕

絶飲食は、前日夜よりも当日朝の方が大変かと思えます。しかし、全身麻酔を受けるときには必要な条件です。食べ物以外にも異物を口の中に入れないかなどにも注意して下さい。歯磨きも、水をたくさん飲む可能性があるときには中止して下さい。午後からの予定の方は、絶飲食の時間を確認の上、早めに朝食をお済ませ下さい。絶飲食が必要な理由をご理解いただき、ご協力のほどお願いいたします。

5. 麻酔当日

〔来院時間〕

- ・午前の麻酔予定の方は午前9時15分までに来院してください。
- ・午後の麻酔予定の方は午後1時15分までに来院してください。

〔常用薬について〕

けいれん止めなど、朝いつも飲んでいる薬があれば、朝の7時30分までに水、お茶。ポカリなどで飲ませて下さい。

〔服装について〕

上半身は、心電計の電極シールを数か所に貼ったり、呼吸状態を観察するため、前胸部が見えるようにします。できれば前開きのものを着用させて下さい。

麻酔中の体温を測るために肛門から細い体温計を入れます。ズボン類は上半身とつながっていないもので着脱しやすいものにして下さい。身体を圧迫する下着類は着用させないで下さい。

[持ち物について]

* 着替え一組

失禁や嘔吐などで衣服が汚れることもあります。念のためご用意下さい。失禁の心配がある場合は、紙オムツの着用、替えオムツの持参をお願いします。麻酔中はこちらで紙おむつを使用させていただきます。目が覚めてから嫌がったり、トイレに立てるときは脱いでいただいて結構です。

* 飲料水（お茶または水）

回復室での経過を見ている間、意識や反応がはっきりしてきましたら水分の経口摂取を始めます。ご自宅から水分（お茶または水）をお持ち下さい。容器などにこだわりがあるときは慣れているものをご用意下さい。食事は帰宅後になります。

[付き添いについて]

麻酔の後は、ふらつきがあったり、頭がボーっとして正確な判断ができなかったりすることがあります。安全のために、必ず付き添いをお願いしています。